

現代紀行文學全集

西日本篇

現代紀行文文學全集

西

道
社

現代紀行文學全集

第四卷 西日本篇

志賀直哉
佐藤春夫
川端康成
監修



昭和三十四年四月五日印刷
昭和三十四年四月十日發行

定價四八〇圓

發行者東京都千代田區神田一ツ橋二ノ五 秋山修道
印刷者東京都千代田區飯田町一ノ二三 中内佐光
發行所東京都千代田區神田一ツ橋二ノ五 株式會社 修道社

電話(30)〇五〇二 振替口座(東京)六一六九一
印刷・曉印刷KK 製本・山田製本印刷KK

目次

早春の旅	志賀直哉	三
三重		
横山	高濱虚子	三三
伊勢の的矢の日和山	壺井 榮	三六
伊賀	近松秋江	三三
滋賀		
湖光島影	近松秋江	三六
山中雜記	安倍能成	四〇
比叡	横光利一	五三
京都		
京に着ける夕	夏目漱石	六三
十年振	永井荷風	六六
朱雀日記	谷崎潤一郎	七四
京洛日記	室生犀星	七五
京都	蒲原有明	二六
京の四季	和辻哲郎	二二
巨椋池の蓮	和辻哲郎	二八

二錢紀

宇治

橋立遊記

奈良

奈良の旅

西京遊記

十月

白い砂土道

夢殿の救世觀音

飛鳥

乘馬靴

吉野の山

和歌山

遍路

熊野路の旅

洗塵紀行

高野山上の春雪

内田百閒……………一三三

福原麟太郎……………一四二

長與善郎……………一四四

安倍能成……………一五〇

廣津和郎……………一五五

堀辰雄……………一五九

里見弴……………一六九

廣津和郎……………一八三

薄田泣菫……………一八八

會津八一……………一九六

龜井勝一郎……………一九九

齋藤茂吉……………二〇九

柳田國男……………二二三

佐藤春夫……………二二六

佐藤春夫……………二三三

大阪

京阪聞見録

木のない都

梅檀木橋

新清水寺

大阪の夕

兵庫

須磨明石

淡路

城の崎にて

山陰の風景

鳥取

山陰土産

日本海に沿うて

鳥取

島根

松江印象記

木下李太郎

宇野浩二

正宗白鳥

萩原井泉水

壽岳文章

長塚節

野田宇太郎

志賀直哉

木下利玄

島崎藤村

小泉八雲

志賀直哉

芥川龍之介

三六

三六

三六

三六

三六

二七〇

二七三

二八三

二八八

二九二

三三七

三三三

三八八

二葉亭研究の旅

隠岐島

山口

三人旅の記

下關より萩まで

萩から山口まで

山口から岩國まで

山口附秋芳洞

廣島

廣島日記

廣島風土記

暗夜行路の尾道

岡山

玉島圓通寺

山遊び

備前街道

中村光夫……………三六一

火野葦平……………三七七

河上徹太郎……………三七八

三好達治……………三八二

井伏鱒二……………三八五

河上徹太郎……………三八八

佐藤春夫……………三九三

井伏鱒二……………三九九

中村光夫……………四〇六

吉井勇……………四二一

木下利玄……………四二七

井伏鱒二……………四三〇

地 図

伊勢・志摩半島三二 伊賀の國三五 琵琶湖・比叡山四六 京都南部六五 京都
 北部七三 巨椋の池一三三 天の橋立一五〇 奈良盆地一六六 法隆寺境内とそ
 の附近一八七 吉野山二〇二 奥よしの二〇九 熊野二一二 紀伊二一六 高
 野山二三五 大阪二四八 須磨・明石二七〇 淡路島二七二 山陰三〇六 石
 見三三七 隠岐島三六七 山口三七八 廣島三九九 岡山四二〇

地圖監修 石田龍次郎
 地名校閲 岡田喜秋

西
日
本
篇

早春の旅

志賀 直哉

一.

旅にはもつと早く出かけられたが、直吉は試験の成績を見てから行きたいといふ。多少の不安があり、それを道連れに旅するよりはすべて安心して楽しく旅行をしたいといふ氣持らしく、私も同意して、十九日出發といふ事にし、寢臺券の用意もした。

その日十時頃直吉は學校から歸つて來た。仲の口の戸の開け方が勢がいい。先づ落第でない事は分つたが、迎ひに出た姉達と靴を脱ぎながら何か云つてゐる聲が如何にも小さいので、一寸氣にかかつた。

直吉は私の書齋に入つて來て、
「××が落ちた」と幾らか悲壯な顔つきをしてゐた。親しい

遊び友達が落第したのだ。

直吉の成績は下から五六番で、餘り香んばしくはなかつたが、久しぶりで行く奈良に落第生を連れて行くよりは私としても兎に角及第してくれた方がいいので安心した。直吉は直ぐ活動寫眞を見に出かけた。汽車は十時四十九分だが、晚めしまでには必ず歸るやうにと云つてやつた。

私のところには平一が遊びに來た。少時して後藤眞太郎が來た。後藤は今度手に入れた鐵齋の大きな牡丹の繪の話をした。嬉しさうで、見せたい風だし、私も見たいと思つたのだが、其日四番目の妹の嫁いだ乾三との約束で、仙臺坂の上の分譲地と一緒に見に行く事にしてゐたので直ぐは出かけられなかつた。

間もなく乾三が今度學習院の初等科に入學した琢二といふ七つの子供を連れ、ベビーフォードといふ小さな自動車で迎ひに來た。皆乗れると云ふので、平一、後藤も誘ひ、一緒に出かけた。

高臺で、品川の海まで見晴らされる三百坪足らずの却々いい地面だつた。今度出來た新田丸の太い煙突が三田と白金の丘の間に近く見えてゐた。私は八つから十四まで芝公園で育ち、その後、十何年間麻布で暮したから、此邊一帯は子供から馴染深く、親しい氣持があつた。賛成すると、乾三も、
「それぢやあ、買ふ事に決めませうかね。これから山岡さんのところへ行つて金があるかないか訊いて來なくつちやあ」

と暢氣な事を云つてゐた。山岡といふのは乾三の本家の執事をしてゐる人だ。

乾三の自動車で日本橋の五葉堂といふ店に行く。後藤の鐵齋の繪が其所へ預けてある。五葉堂の看板は武者小路の字で、その本物は家の中に額にして懸けてあつた。二階で色々なものを見せて貰つた。古赤繪の唐子を澤山描いた大きな壺だとか、古九谷の完全な鉢子だとか、さういふ高價なものをこの主人は無難作に其邊に並べた。後藤は又、鐵齋の繪の他に宣徳赤繪の美しい鉢（此鉢はのちに私の家の新築祝ひに後藤から贈られ、今は手元に愛藏してゐる）だとか萬曆赤繪の大きな皿だとか、宣徳の鉢と同型の弘治年製の鉢だとか、色々な物を近い自分の事務所から運ばせて見せてくれた。鐵齋の繪は油繪のカンヴァスでいへば十五號位の桐板に描いたもので、大きな牡丹の朱の色が強く、美しく、まはりには梅、水仙、菊などが描いてある。惜しい事に額縁が合はず、それに硝子に入つてゐるので見にくかつた。

琢二が厭きて、そろ／＼活動し始めた。其所にあるものはいづれも高價なこれは物なので、乾三は先に其所を引きあげて行つた。――幾日かして、私は又琢二と一緒に自動車で出かけた事があつたが、琢二は乾三に、

「パパ、又たからものを見に行くの？　又たからものを見に行くの？」と繰返し、不安さうに訊いてゐたが、

「今日はさうぢやあない」と云はれると、琢二は急に上機嫌

になり、

「僕、たからものには參つたよ」と云つてゐた。

七時過ぎ、平一と後藤に別れて歸つた。

寢臺は上段で向ひ合ひだつた。直吉が何時までも枕元の小さな電燈で本を見てゐるのが氣になつたので、聲をかけ、やめさせた。

米原で起き、直吉を起こし、一緒に食堂車へ行く。寢足りた氣持で氣分がいい。刈田と枯葎の窓外の景色が私を楽しませる。入江、それから低い川楊のある小さい流、遠く雪を頂いた比良とその連山、その頂きに朝日がさし、雪が桃色に輝いてゐる。まことに穩かな、日本的な景色だ。奈良に住んでゐた頃、東京へ出た歸り、疲れていつも此景色を眺め、やれやれやつと歸つて來たと思つたものだ。今度は自家が東京なので、さうは思はなかつたが、矢張り心は楽しんでゐる。彦根、安土、瀬田、山科、そして京都に着いた。一時間前の汽車で來た弟の直三が待つてゐる筈の京都ホテルに行く。

暫くして三人は五條坂の河井寛次郎君を訪ねた。自動車の中で直吉に、

「前に河井さんの所へ行つた事がある。覚えてゐるか」と訊いたら、

「覚えてゐる。黒い猫がゐた。それから胡麻の入つたお煎餅を食つた」と云ふ。

河井君の所では田舎造りの爐ばたで、奥さんのおてまいで

お茶を御馳走になり、氣樂に話した。近江邊の古い民家の話、琉球の話、棟方君の描いた大原孫三郎氏の所の襖繪の話。河井君は、

「鐵齋以上ですよ」と云つてゐたが、本物を見ずに反對するもの變で、そんな筈はないと思ひながら黙つてゐたが、その後で、今日午後榊原紫峯君を訪ね、今度造つた自慢の庭を見せて貰ふつもりだと云ふと、河井君は言下に、

「それはいい筈はないですよ」と云つた。自分は棟方志功の「鐵齋以上」に遠慮してゐて損をしたと思つた。柳が前に木喰上人の佛像の微笑を推古佛の微笑以上だと云つた事がある。一つの運動を起す者の心理で、嘘とは思はないが、さりとて一緒にさう思ふわけには行かない事も時々ある。日蓮上人の「禪天魔、眞言亡國」の類である。自分は柳達の民藝運動は後になれば今の人が考へてゐる以上に大したものになる事は認めてゐるが、自分の性質からいへば如何なる運動にも縛られる事は閉口だ。

河井君の仕事場を見せて貰ふ。琉球の人が二人働いてゐた。若い米國人が蹴轆轤で茶碗をひいてゐた。河井君は此三人を紹介してくれたが、今は名を忘れた。琉球の年寄つた方の方は、相當經驗ある人で、米國人の轆轤のコーチをしてゐた。琉球の人は米國人に通じない言葉で教へてゐるが、その手が物を言ひ、話は通じた。河井君の話では米國でも近頃は機械工業でなく手工業のものが段々人に喜ばれる傾向で、自分の

家に陶磁器の籠を作つてゐる人等もあり、此若い人も米國でそれをやつてゐたが、二三月前日本に来て、河井君の所に弟子入したのだと云ふ。

「長足の進歩ですよ」と河井君は讃めてゐた。

自分は奈良の家を賣る時、世話になつた人達に記念に河井君の茶碗を贈りたいと思つてゐたので、抹茶茶碗と湯呑を幾つか貰ふ事にした。それをあれこれ選んでゐる内、

「これは人にやるのは少し惜しいな」と云つたら、河井君は「志賀さんにそれを進呈しませう、あとで東京のお宅へ送らせませう」と一つその茶碗を別に離して置いた。

ひる、御馳走になつてゐる時、直吉が黒猫と津輕の胡麻煎餅だけで此家を記憶してゐた話をする、河井君は奥さんにその黒猫を抱いて來さし、見せてくれた。嘗ての小猫は今一人前になつて、眞黒な顔に威嚴のあつた金色のこはい眼を光らしてゐた。

河井君の家を辭すると、私と直吉とは大徳寺山内の紫峰君を訪ねた。直三は前に插花を習つてゐた西川一草亭氏の三回忌法要に出席するため、白川の方へ出かけて行つた。

紫峰君の家は立派に出来上つてゐた。此屋敷は元大徳寺中の廢寺の跡で、建物はなかつたが、屋敷の隅に肥前平戸の城主松浦家の墓があり、これが問題になつて、地面は手に入れたが、却々建築にかかれず困つてゐた。私は中學時代、ボートの選手仲間で松浦純君と親しかつた關係で、その純君は今

の伯爵の伯父に當るところから、私は純君を介して松浦家に頼んで貰つた。話は至極簡単に運び、元々本統の墓は平戸にあり、此處はいはば遙拜所のやうな意味の墓で、丁度今、さういふものを整理してゐるところだとの事で、處置は一切紫峰君に任かせるといふ大變好都合な返事を貰つた。ところが、此墓を管理してゐる寺の和尚が八釜しい事を云ひ出し、一昨年の夏、紫峰君に連れられ此地面を見に來た時には既に廣い屋敷一杯に大きな山石がゴロゴロ置いてあり、木材なども一ト通り揃つてゐる風であつたが、建築の運びに至らず、その儘になつてゐた。それが出來上つたといふ知らせを貰ひ、私も口をきいた關係上、此旅では紫峰君に會ふのも楽しみ、その家を見る事も楽しみにして來たのである。

前の岡崎天王町の家の親しみのあるいい家だつたが、今度のは却々堂々たる家であつた。庭は出來たばかりで未だ落ちつきはなかつたが、あれ程澤山あつた大きな石が、兎に角然るべき場所に皆をさまつて了つたのには一驚を喫した。松浦家の大きな墓も座敷から見えるやうにしてあり、紫峰君は引續き此墓を自分はお守りするつもりだと云つてゐた。一尺四五寸角の丈の高い墓石は既に何百年の年月を経て石の面もさびてゐた。

庭は横に長く、縁に添うて綺麗な水が流れてゐた。造りは自然であつたが、モーターで地下水を汲上げるのだと聞くと、矢張り興をそがれるやうで、素直には楽しめなかつた。自分

の貧乏性かも知れない。

座敷から居間に行く。床に大きな佛像が安置してある。九州系統の豐頬の非常に美しい像で、東大寺法華堂の吉祥天のやうでもあり、正倉院御物の樹下美人のやうでもあり、その後寫眞で見た大同石佛の明り窓の浮彫像の或物にも似てゐるものであつた。紫峰君の岡崎の家でも此系統の本地の荒れた佛像を見た事があるが、今度のものは又數倍それよりも美しかつた。

居間近く屋根のついた金網の中に山娘と云ふ、鵲の類であらう、尾の長い美しい鳥が二羽飼つてある。此鳥は私には數年來の馴染だが、他にも色々飼つてゐる中から、山娘だけを居間近く置くのは、恐らく此鳥の性質が氣輕で陽氣で人なつこいからであらうと思つた。山娘は長い尾を立て、泊木を上にな下に忙しくとび移つてゐた。

其日はどんよりした曇日で、風もなく、寒くもなく、空氣の肌觸りも柔かく、眠氣を催すやうな快い日であつた。私は久振りで鷹ヶ峰を少し歩いて見たいと云ふと、紫峰君は早速自動車を命じてくれた。大徳寺山内を抜け、今宮神社の前から勾配の緩い坂道を登り、光悦寺に行つた。石疊のだら／＼坂を下りて行く。寺の中は夕暮近くで、人影もなく、靜か過ぎる程靜かだつた。私は十六七年前、一度來た事がある。其頃、此所に新しい茶席が幾つか建てられ、それらが如何にも殺風景な感じで感心しなかつた。骨董屋が建てたものだと言

ふ。然し谷を隔てた前の山は光悦くわくえつの蒔繪などに見る山そのままで、これは大變美しく思つたことを覚えてゐる。ところが今此所に来て、當時私の興を醒ました茶席がそれ／＼古るさびて人手も餘り入つてゐないらしく、ひどく落ちついたものになつてゐた。多過ぎると思つたかういふ小さい建物も十七年の間に兎に角周圍の景色の中に溶込んだ感じがした。

然し實際私達を楽しませたのは山の端から見た、矢張り前の山の景色だつた。それを鷹ヶ峰といふかどうかは知らないが、美しい赤松の綺麗に生え揃つた丸い山、その松の赤い幹と緑の葉は洗ひたてのやうに鮮やかだつた。見下ろす山峽には小さい流があり、丸い山の裾をめぐつてゐる。掃除したばかりのやうな清潔な畑には三四人の男と女の働いてゐるのが下の方に見えてゐた。私は和やかない気分になつた。

此感興は再び來て同じやうに感じられるかどうか分らない性質のものだが、現在の感興が私だけの主観でない事は紫峰君も感心してゐる事で私には分つてゐた。只一緒に居る直吉がどう感じてゐたか、これは訊いて見なかつたが、「いい加減にきり上げて呉れないかな。腹がへつて來た」とこんな事を思つてゐたかも知れない。子供は光りのないかういふ靜かな景色、しかも寺は、決して愉快には感じないものだらう。私達は京都の北の郊外を上かみ加茂まで行き、名物の餅を買つて、加茂川の堤から又紫峰君の所へ還つた。

その晩、直三と直吉を連れ、寺町から新京極、四條通り、

河原町などを歩いた。直三は所々の骨董屋に入つて安い花器を探した。

直三は東京で插花を人に教へてゐる。私にその流儀名をつけて呉れといふので、慈光流といふ名をつけてやつた。大和國小泉に慈光院じくわういんといふ禪寺がある。此處は片桐石州のゐた所で、庭もよく、庭から見た景色もよく、石州の木像などもあり、石州流では大事な寺であるが、私が直三の插花につけた慈光流は石州流と關係あつての事ではなかつた。慈光流即ち自己流を意味したつもりだつたが、直三は自分のは自己流ではないとの事で、折角の工夫も止むを得ず、今度は一草亭の弟子だつた事を表はし、慈草流と變更した。直三は插花に自信は持つてゐるが、未だ花器の持ち合せが少ないので、今その蒐集をしてゐる。河井君の所でも琉球釉りゅうきゆうの物を一つ送つて貰ふ事にしてゐた。

大阪へ行き、その晩の汽車で歸ると云ふ直三と翌朝、七條の驛で別れ、私と直吉とは電車で奈良へ向かつた。

私は京都で二年、奈良に十三年、前後十五年間此邊の景色に親しんで來たから、久振りに眺める窓外の景色は珍しくはないが、何か淡い樂しみとなつた。然るに奈良で生れ、奈良辯を使つて育つた直吉はこれらの風景に對し、何の感情も持つ風なく、首を不自然な位に垂れて、持つて來た大家小説に全心惹込まれ、讀耽つてゐた。

「おい。宇治川だ。工兵の鐵舟が浮いてゐる」

私がかういつても、一ト言では返事もしない。二度目に漸く首をあげたが、義理一遍に黙つて一寸窓外を眺めるばかりで、いつか又小説を讀んでゐる。

木津川の鐵橋へかつた時にも私は直吉が幼稚園の頃、よく此廣い砂原に連れて來て、綺麗な浅い流で泳がしてやつた事などを憶出し、

「木津川に來た。久しぶりで來たんだ。少しはそとを見ろよ」と云ふと、直吉は困つたやうな變な笑ひを浮べ、本を伏せ、拳固で首筋を叩きながら窓外を見るが、依然何の興味もない風だ。つまり、私のやうな感傷主義がないのだ。折角の興味を中斷されるこんな景色は、その事ゆゑにも面白いとは思はないかも知れない。事實、私と雖、今書きながら沿線の景色を細々書く氣にならぬところを見ると、それ程興味を持つて見てゐたわけではなかつたかも知れない。只、私には若い頃から持越しの感傷主義があり、久振りで來たといふ事で、殊更それに溺れる傾きがないとは云へない氣がした。何れにしろ、子供が餘り感傷的なのはよくないが、直吉のは少しさつぱりし過ぎてゐる。

平城、西大寺、油坂、そして奈良。奈良に來て最初の印象は不相變の奈良だと云ふ事だつた。ホテルへの途中、眼に入るもの總て餘りに見馴れたものばかりだ。角の奈良漬屋、圖書館、裁判所、武德殿、師範學校、博物館、右に折れて一の鳥居から荒池。堤防のやうな荒池の路が前より廣くなつた位

で、總ては不思議なほど不相變であつた。然し又、公園の杜の上に高く、春日山を望んだ時には不相變いいところだとも思つた。

「何も彼もあんまり同じだね。二年間高田馬場に住んで來たやうな氣が少しもしないぢやないか」

直吉も同感してゐた。

奈良はいい所だが、男の兒を育てるには何か物足らぬものを感じ、東京へ引越して來たが、私自身は未だに未練があり、今でも或時小さな家でも建て、もう一度住んで見たい氣がしてゐる。殊に去年の夏、苦しい病氣で寢てゐる時には矢も楯もたまらず奈良に歸りたかつた。それまでは奈良の住ひを賣る事にしてゐたので買手の話もあつたが、それを斷り、病氣が直つたら自分だけ奈良に住み、月の十日程東京に出て來る事にしようなどと考へてゐた。然し暫くして世田谷新町の靜かな場所に家を見つけ、それを買ふ事にした時、買ふためには賣らねばならず、私は漸く奈良の住ひを念ひ斷つた。ところが、私の娘達は遊びには行つてみたいが、再び奈良に住みたいとは思はぬと云つてゐる。娘達は若く、私は年寄つたからであらうか。

午後、河井君の茶碗を持つて、上高畑の中村義夫君を訪ね、それから若山君の所へ行つた。若山君の二番目の兒の良ちゃん、直吉より一つ下で小さい時から親しい友達で、直吉は良ちゃんのために七つ道具の出るナイフを持つて來た。瘦せ